

第 66 回国際理解・国際協力・多文化共生のための全国中学生作文コンテスト東京都大会 特賞

聖心女子学院中等科 2年

オレア ケアラ フランセス

課題 ③

平和と安全、貧困、気候変動など世界中で様々な課題がある中、国際社会が優先して取り組むべき課題は何か。

副題

なし

本文

③

「ヒューマンであれ。」これは日本人初、そして女性初として UNHCR のトップを務めた緒方貞子さんの言葉だ。

緒方貞子さんは、私の学校の卒業生である。私は低学年の頃から授業や講演などを通して、彼女の行った偉大な活動や世界中に伝えようとしたことを学んできた。その学びの中で今でも私の心に一番残っているのが、この「ヒューマンであれ」という言葉だ。

私の父はアメリカ人、母は日本人で、二つの文化に触れながら育ってきた。その中で、同じ出来事についてでも立場が違えば、受け止め方や伝え方が変わると感じることもある。例えば、同じ時事についてアメリカと日本のニュース番組をそれぞれ見ると伝え方が全く違うことがある。だから私は「どちらの意見の方が正しいのか」と考えてしまうことも少なくない。それはオリンピックなどの国同士で戦うスポーツの試合を見ている時にも感じることもある。アメリカと日本のチームが対戦していると、「私はどちらを応援すべきなのか」といつも悩んでしまう。日本に住んでいる国民として日本を全力で応援したい気持ちがある一方で、アメリカの国籍を持っているからこそ同じくらい応援したい気持ちもある。しかし、年を重ねていくうちに私は「どちらの国を応援すべきか」ということよりも、その選手一人一人が、どのような経験と思いを胸にその場に立っているのかに目を向けたいと思った。住んでいる国が違っただけで相手を自分とは遠い存在の敵として見る必要はないと思う。なぜなら、勝負の中では互いに競い合っている、目の前には同じように努力し、たくさんの人に支えられてその場にいる一人の人間がいるからだ。

ここで私は緒方貞子さんについて学校で学んできたことを思い出した。彼女は「難民」を一つの大きなくくりとして、ただの人数として見たのではなく、一人一人に大切な家族や日常がある「自分と同じ大切な人間」として見ていたと学んだのだ。

これは国と国との関係でも同じように見られるのではないだろうか。国連にはそれぞれ異なる文化や価値観を持った193カ国が集まっている。だから意見が対立してまとまらないことも当然あると思う。しかし、この世界は「アメリカ人」「日本人」「難民」という言葉だけで分けられるものではない

い。どの国に生まれた人にも大切な家族や日常があって、叶えたい夢がある。私たちは違う国で生きていても、「同じ地球に生きる仲間」なのだ。だからこそ国連は全ての国を一つの意見にまとめるために存在するのではなく、それぞれの意見を認め合い、加盟国が共有するこの世界をより良くするために話し合う場であると思う。

私が考える国際社会が率先して取り組むべき課題は、地球規模の特定問題ではない。それは世界の各地で起きている事態を心に留め、そこで実際に苦しんでいる人々に共感するという小さな課題だ。なぜなら、地球上で起きていることに「自分には関係がない」と言える場所はどこにもないからだ。相手の問題を自分とは無関係なものとして切り離すのではなく、共に向き合う姿勢が必要だと思う。

「ヒューマンであれ。」私はこの言葉を「国」という違いを越えてどんな相手でも自分と同じように尊重し、理解しようとする事だと受け止めている。国境は国家との境界線であっても、人間一人一人を分断する線ではない。私たちが「国」という枠を越えて向こう側にいる一人の人間を見ることができた時、初めて国と国との間に対話が生まれるのではないだろうか。

世界を変えるのは、国と国との大きな約束だけではない。私たち一人一人の互いを理解する行動こそが世界を変えていくと私は信じている。